

テーマ

「青少年育成のためのキャンププログラム、タッチ・ザ・ネイチャーについての追跡調査」

学籍番号 **12012025**

氏名 河崎文彦

指導教員 立木茂雄

## 目次

- 1 序論
  - 1.1 問題提起
  - 1.2 方法と論理的根拠
  
- 2 先行研究の展望とタッチ・ザ・ネイチャーの概要
  - 2.1 先行研究
  - 2.2 タッチ・ザ・ネイチャーの概要
  - 2.3 2002 年度調査概要
  
- 3 方法
  - 3.1 対象者
  - 3.2 用具
  - 3.3 手続き
  
- 4 結果
  - 4.1 聞き取り調査の結果
  - 4.2 2002 年度の調査票調査の再分析の結果
  - 4.3 今年の調査票調査の結果
  
- 5 考察
  - 5.1 パーソナルリーダーの効果について
  - 5.2 2002 年度のデータの再分析の考察
  - 5.3 2004 年度データの考察

## 1 序章

### 1.1 問題提起

近年、青少年育成のためのキャンププログラムが多く行われている。そして、それに伴う効果についても多くの研究がなされている。しかし、それらのキャンププログラム行い、時間が経過したのち、その体験がどのように参加者に理解され、どのような形で参加者のなかに定着しているかについての研究はあまりなされていないように思う。そこで、本研究では、2002 年度に調査の行われたキャンププログラムである、タッチ・ザ・ネイチャープログラムを対象に、これの体験者の主観的なプログラムの解釈を通して、彼らの中にタッチ・ザ・ネイチャーがどのように定着しているのか、また、定着していないのかを明らかにする目的で調査を開始した。

そして、調査を進めるにしたがって、タッチ・ザ・ネイチャー参加者の多くがパーソナルリーダーといういわゆる生徒会組織に属していることが明らかとなってきた。それでは2002 年に行われた調査で報告された効果は、本当にタッチ・ザ・ネイチャー自体による効果であったのか、パーソナルリーダーの効果ではなかったのかという疑問が出てきた。そこで、果たして2002 年の調査で報告された効果は果たしてどちらの効果であったのか、また、パーソナルリーダーの効果があるとしたら、パーソナルリーダーのどのような性質がそれを引き起こしたのかを明らかにしたい。

### 1.2 方法と論理的根拠

今回はプログラム体験者の主観的なプログラムの解釈ということからさまざまなことを明らかにしていくため、体験者から聞き取り調査を行い、そこで明らかになったことを2002 年の調査で使用したのと同じ調査票を今回も聞き取り調査の対象者に行い、質的な調査の裏づけを量的な調査から行いたい。

## 2 先行研究の展望とタッチ・ザ・ネイチャーの概要

### 2.1 先行研究

青少年育成のためのキャンププログラムが自己概念や社会的態度などに効果があるとされ、近年多く行われており、その効果についての研究も多くなされてきた。そのキャンプにもさまざまな形態があり、それぞれに研究がなされてきた。

ひとつは、キャンプを1人で行うというものがある。これはキャンプを、思い通りにはならない状況や、与えられた困難な課題を乗り越えることで、自信をつけ、自己を変化させるというものである。こういった研究の多くは、自己理論の枠組み（A framework of self-theory）の中で展開されており、特に自己概念の向上が中心となっている（飯田ほか1988）。

もうひとつは、川村（1981）のように、個人ではなく、集団で困難を克服することで、困難の克服と、仲間との連帯感を感じさせ、それによって自己の向上を促すというものもある。

こういったキャンププログラムの研究は心理学の観点、教育学の観点からなされており、そのほとんどが自己概念の変容が重要であり、それが外界との接触によって起こるとかんがえている。

しかしこれにはその変容を引き起こしたのが、キャンプのどのような「場」や「関係性」であったかについての考察が弱いと考え、C・H・クーリー（1902）は自己は鏡としての他者を通じて映し出され、そこから生み出されると考えた。また、G・H・ミード（1934）は役割期待に応じる形で自己が形成されると考えた。最近では浅野（2000）が「自分は～である」というように自己について語ることを通して生み出され、その語りはつじつまの合わないものは隠蔽され、他者に対して語られ、他者の批准を受けることにより、矛盾を隠蔽することが自己を支えるためには必要である。そして、自己を変容させるためには自己の物語に隠された矛盾に気づくことが必要であると考えた。これらは自己を他社との相互作用を通じて形成されると主張する理論である。これらの理論に基づき、キャンププログラムの効果を他者のとの関係のありようの変化と捉えたのが、本タッチ・ザ・ネイチャープログラムの研究を昨年行った吉本顕太朗である。

この研究は吉本の研究の追跡調査という形で、このプログラムが2年経過した現在、体験者の中にどのようなものとして残っているのか。また、そこから新たなキャンププラ

ラムの効果を探るといふ目的のもと開始した。プログラム経験後すぐではなく、時間が経過したあとの効果を図るといふ意味で、この研究は意味があると思ふ。

## 2.2 タッチ・ザ・ネイチャーの概要

本研究で扱うキャンププログラムは、財団法人こども教育支援財団が主催する「タッチ・ザ・ネイチャー」といふキャンププログラムである。2001年から開始され、2003年まで3回行われた。本研究で対象とするのは2002年度のタッチ・ザ・ネイチャーである。現在は同じような形態をとる、「大志の森」といふプログラムとして続けられている。タッチ・ザ・ネイチャーはクラーク記念国際高等学校の1年生から3年生までを対象に行われるもので、同財団の職員や、同高等学校の教員の指導のもと、キャンプリーダーとして、小学生キャンパーの指導にあたる。

対象者の多くは以前に不登校の経験のある高校生である。

本プログラムの目的は、現在は高校に登校しているが、中学生のときに不登校を経験した生徒の更なる成長を促そうといふものである。従来のキャンププログラムとの違いは、従来のものは、対象者がキャンパーとなり、大人の指導をうけて行うものが多かったが、このプログラムでは、対象者は教員などの指示をうけて行動するが、プログラムの計画から参加し、小学生キャンパーの世話を第1に行うところが異なっている。

具体的な内容は、キャンプ中は小学生数人につき、リーダー1名、サブリーダー1、2名で、1班として、班行動をとる。高校生リーダーたちは、高校教員や、財団職員の指示を受けて、決められた課題を遂行し、同時に、自分の班の小学生キャンパーの世話をすることが求められた。

キャンププログラムは2002年度の4回目を除き、デイキャンプであった。畑での農作業や昼食の調理、バスの中でのレクリエーションや、キャンプ中のゲームやクイズなどが主ならないようであった。

表 1 タッチ・ザ・ネイチャー各回の内容

回	月日(曜)	実施内容	リーダー人数	小学生数
第 1 回	5 月 19 日 (日)	サツマイモ植付け 餅つき アスレチック ネイチャーゲーム ネイチャースタディ	13 名	21 名
第 2 回	6 月 16 日 (日)	昆虫採集 サツマイモ・ジャガイモ発育調べ アスレチック 飯ごう炊さん ネイチャースタディ	17 名	47 名
第 3 回	7 月 7 日 (日)	ジャガイモ収穫 オリエンテーリング 飯ごう炊さん ネイチャースタディ	18 名	53 名
第 4 回	9 月 15 日 ~9 月 16 日(日・祝)	サツマイモ収穫 かぶら・大根植付け 収穫祭 オリエンテーリング(雨天の為) ネイチャースタディ	18 名	36 名
第 5 回	11 月 17 日 (日)	かぶら・大根収穫 ネイチャーゲーム ネイチャースタディ 表彰式	18 名	40 名

(吉本 2003: 2)

### 2.3 2002 年度調査概要

本研究は吉本の研究、データをもとに行っているため、以下は 2002 年度に吉本が行った

調査の概要を述べる。

キャンププログラムを通してどのような社会的、心理的なプロセスが起こるのかを知るために、プログラムを実際に体験した高校生リーダーに話を聞き、このプログラムに参加することで、どんなものが得られたと感じているかを言語化する作業を行い、2つのことが出てきた。ひとつはあまり接することのなかった子供との接し方を覚え、兄弟のような気分を味わい、子供嫌いが子供好きに変わっていった。さらに、年長者としての自覚が芽生え、自分がどう振舞えばいいか、自ら考え、行動できるようになったということ。もうひとつはリーダーとしての自信、チームワーク、周囲の状況に対する対応能力、リーダーとして子供たちを指導していくことへの自覚や自信、自発性が身につき、1人1人に責任感や協調性が養われるということである。図1はそのワークショップの高校生の発言をもとに、かれらの体験を鳥瞰図として吉本がまとめたものである。

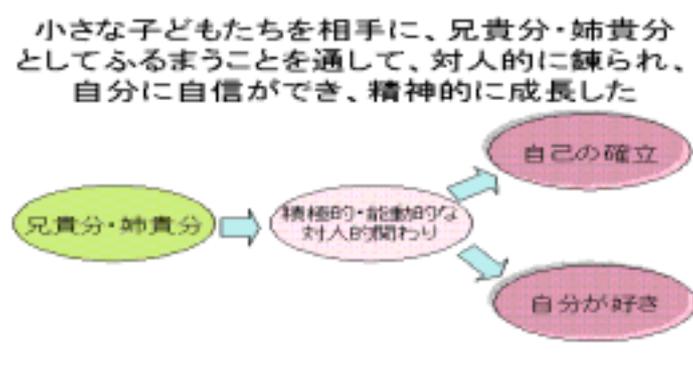


図1 タッチ・ザ・ネイチャー体験鳥瞰図

(吉本 2003: 14)

これを元に、以下の4つの尺度を用いて、調査表を作成し、調査票調査を行った。

尺度1、兄貴分・姉貴分尺度 …これは子供が好きで世話をするのが苦にならない、楽しいという意識を測る尺度で、独自に開発したものである。

尺度2、社会的コンピテンス尺度 …能動的な対人的関わりを測る尺度として、栗本(1997)が開発したもので、効果的に環境と相互作用する能力のことをいう。その要素は人とのやり取りのなかで、何が適切な行動であるか判断する能力。相手の感情を相手のみになって感じる能力。自分の欲を満たそうとするとき、環境から与えられるのを受身で待つのではなく、自ら環境に働きかける能力の3

つからなる。

尺度 3、自我同一性尺度 …自己の確立を測る尺度で、立木・栗本（1994）の「自我同一性尺度（ego identity scale）を用いた。吉本によれば「自我同一性とは、エリック・エリクソンの人格発達理論にもとづく概念で、『自己がどの程度確立されているのか、どのような人格になりたいと思っているのか』を意味する。」

（2003: 24）

尺度 4、自己受容尺度 …自分が好きである程度を測る尺度として今村ほか（1998）の開発した、自己受容尺度を用いた。ここでの自己受容とは、自分のことをよくわかっており、自分について客観的にわかっている態度と、自分のことをよくないと思っているか、自分について主観的にしかわかっていないかという問いに対して、それを否定する態度の 2 つの側面からとらえ、自己の現実の姿について正確な観察を行い、その姿をありのまま受け入れることである。

以上の尺度を用い、キャンプを行う直前と直後にそれぞれ同じ調査票を用いて調査を行い、それぞれの得点を出した。

この調査票調査の対象者は、実験群に、クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパスの生徒で 2002 年度にタッチ・ザ・ネイチャーにキャンプリーダーとして参加した 33 名であり、うち、事前と事後ともに回答したのは 30 名で、有効回答は 30 であった。そして、比較するための統制群として、実験群の 33 名をのぞいた同高等学校の同キャンパスの全校生徒 390 名で、事前、事後両方の調査に回答したのは 341 名で、有効回答は 335 であった。

この結果からそれぞれの尺度ごとに SPSS を用いて散布図の作成と分散分析を行った結果、事前と事後で得点が大きく下がってしまった C さんをのぞくと、4 日以上参加者に対して効果が有意と認められた。

### 3. 方法

#### 3.1 対象者

対象者は2002年度のタッチ・ザ・ネイチャープログラムに参加したクラーク記念国際高等学校芦屋キャンパスおよび夙川キャンパスの卒業生と在校生33名のうち、聞き取り調査のできた14人と、同高等学校同キャンパスの卒業生で、タッチ・ザ・ネイチャーに参加していない当時2年生1人で、そのうち4日以上参加した者は4名、1日以上4日未満参加者10名である。

#### 3.2 用具

本研究では聞き取り調査を行ったあと、2002年度の調査で使用した調査票と全く同ものを用い、調査票調査も行った。聞き取り調査に関しては、本人了承のもと、ICレコーダーでの音声の録音と、ビデオカメラによるインタビューのようすの撮影を行った。

#### 3.3 手続き

まず、今回の調査では、タッチ・ザ・ネイチャーを経験した人の中に、2年という時間が経過した今、その経験がどういう形で残っているのか、または残っていないかを浅野(2000)の自己物語の観点から探る目的で開始した。つまりタッチ・ザ・ネイチャー体験が体験者の自己についての物語の中にどのような形で組み込まれているのか、あるいは組み込まれていないのか、現時点での彼らの物語を聞き取り、解釈を試みるということである。

自己物語ということ、つまり主観的な語りが必要になるため、インタビュイーは1人とインタビュアー1人ないし2人という形で行った。図2は今回の調査のフレームである。

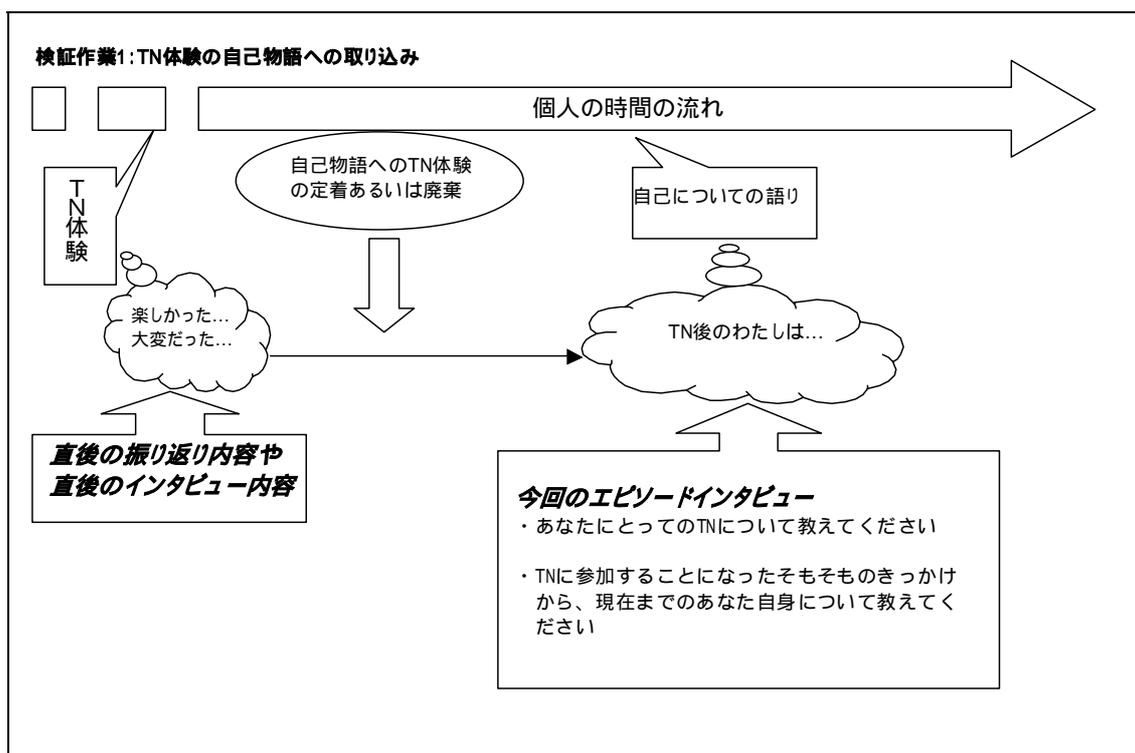


図2 2004年度調査フレーム

自己についての物語を聞きだすために、できるだけ1問2答にならないようにナラティブインタビューを試みた。表2に質問項目を示す。

表 2 2004 年度質問項目

概念	問いかけ	話の糸口
TN プログラムの主観的解釈	あなたにとっての TN について教えてください	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TN とは、いったいどんなことなんですか？</li> <li>・ リーダーとは、どんな役割でしたか？</li> <li>・ 振り返りの会とは、あなたにとってどのようなものでしたか？</li> <li>・ どんなことが参考（勉強）になったのでしょうか？</li> <li>・ TN ならではのことがらはなんだったのでしょうか？</li> <li>・ 印象に残っているエピソード（できごと）を教えてください</li> <li>・ TN で経験したことがあなたにどのような影響を与えているのでしょうか？</li> </ul>
ナラティブ	TN に参加することになったそもそのきっかけから、現在までのあなた自身について教えてください	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ あなたが TN に参加することは、どのようにして決まったのでしょうか？</li> <li>・ 参加が決まったとき、どのように感じましたか？</li> <li>・ 実際参加してみてどうでしたか？</li> <li>・ TN で初めて体験したことはなんでしょうか？</li> <li>・ TN で初めて気づいた自分の 1 面はどんなところでしょうか？</li> <li>・ TN で初めて出会った人とはどうでしたか？大学生はどんな印象でしたか？</li> <li>・ 初めて体験したり気づいたりしてから、今現在はどうですか？</li> </ul>

以上のような質問から、体験者からみた主観的な解釈を聞き出すことで、その人の中でタッチ・ザ・ネイチャーがどのように自己物語の中に組み込まれているか、またはいないかを探り出すと同時に、タッチ・ザ・ネイチャーのなにかがその人の印象に残っているのかを探ることで、何が効果を及ぼしたのかを探ることを意図した。

こうして出てきたことから、パーソナルリーダーという存在が浮かび上がってきた。そこで、2002 年度の調査表調査の結果に、新たに、パーソナルリーダーの所属の有無がどういう影響を与えたかを調べるために、これを変数を加え、再度分析を行った。パーソナルリーダーに関しては「4.1 聞き取り調査の結果」のところで詳しく述べる。

## 4. 結果

### 4.1 聞き取り調査の結果

聞き取り調査の結果、2002年度のタッチ・ザ・ネイチャーに参加した33名のうち13名がパーソナルリーダー所属者であることがわかった。4日以上参加者7名のうち、5名がパーソナルリーダー所属者であり、今回聞き取り調査が行えた15名のうち9名がパーソナルリーダー所属者であることがわかった。以下に2002年に主に活動していた、当時2年生のパーソナルリーダーの特徴を述べる。

- パーソナルリーダーとは生徒会組織のようなものである。
- 選出は全校生徒による選挙の投票などで決まるものではなく、入りたければ自由に入ることができ、やめたければ自由にやめることができる。
- 彼らは非常に仲のよい、公私において仲よし集団であったようだ。
- 同高等学校、同キャンパス先生方も驚くほど歴代のパーソナルリーダーの中で活動的で近年まれに見るものであった。
- その活動は多岐にわたり、本人たち曰く「いろいろやりすぎて何やったか覚えてない。」くらい活動していた。
- 彼らのほとんどはボランティア部にも所属しており、もともとボランティアに興味がある、もしくは進んで行く傾向がある。ボランティア部=パーソナルリーダー
- 彼らの正式な活動としては、同キャンパスの地域のお祭りであるドラゴンボートの手伝い 同高等学校の学校説明会の準備と進行 入学式、失業式、文化祭、始業式、終業式の企画、準備、進行などがある。
- 上記の活動以外にも正式な活動ではないが、自由公募の課外活動で参加したものが集まってみたらパーソナルリーダーばかりで半パーソナルリーダーの活動化したものや、何かの活動に参加する際、声をかけるのがパーソナルリーダーメンバーであるため、パーソナルリーダーの活動化したものも多数あり、タッチ・ザ・ネイチャーもこれにあたる。
- また、学校側が決めた活動以外にも本人たちがやりたいものを企画し、それが学校側に通って、新たな活動としたものもある。

彼らの物語のなかでは大体ほとんどの生徒がパーソナルリーダーに入ったから、様々な活動に参加でき、それがかれらを大いに成長させたと言っている。それというのも、1

人ではなかなかさまざまな活動に参加しづらいが、パーソナルリーダーのメンバーも参加するため、不安感と抵抗感が少なく、たとえあまり興味のない活動であったとしても、仲のいい友達に参加するため、遊びに行く感覚で、さまざまな活動に参加できたからだとも語っている。また、もしパーソナルリーダーに入っていなければ、今のような成長はないとも語っている。

#### 4.2 2002 年度の調査票調査の再分析の結果

以上のことから、2002 年度にとった調査票のデータから、4 日以上、4 日未満、未参加の変数とは別に、パーソナルリーダー所属の有無を変数に加えて SPSS を用いて対象者 1 人 1 人について、事前と事後各調査における 4 つの尺度得点を計算した。そして、4 つある尺度得点それぞれについて、事前の得点を横軸、事後の得点を縦軸にとるような散布図を作成した。この散布図上では、事前と事後の得点によって、各対象者をあらかず位置を決定されて散らばっている。以下の図や表は事前と事後で大きく得点が下がってしまった C さんを除いたものである。なお、検定での危険率は 0.05 に設定している。

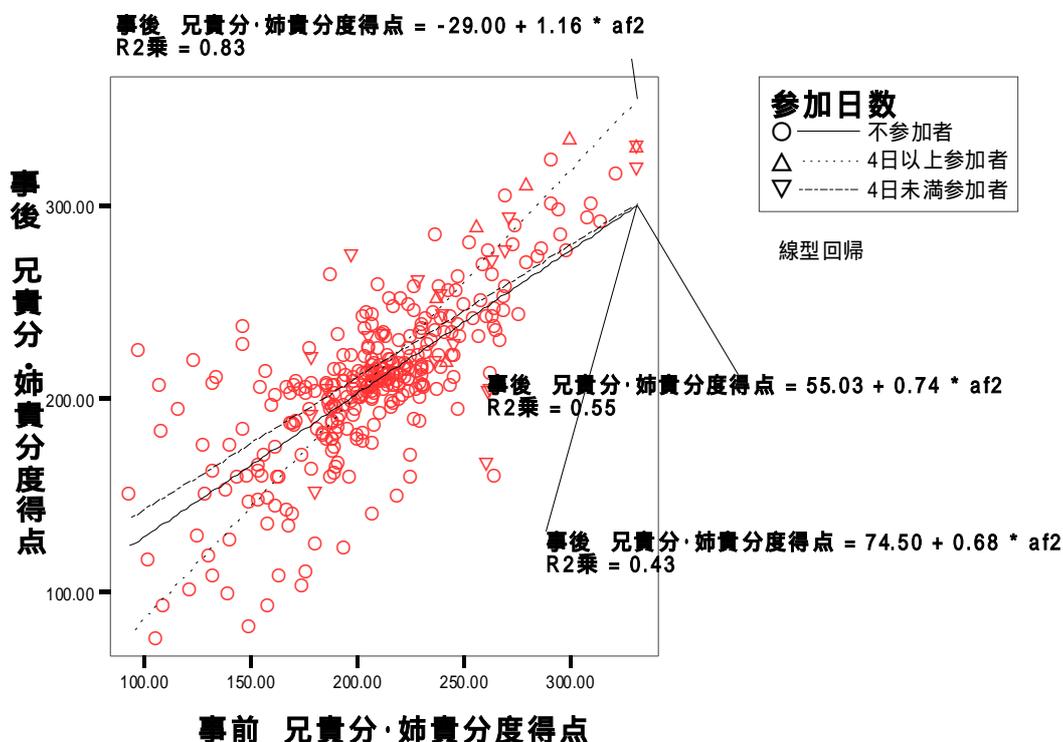


図 3 2002 年度 兄貴分・姉貴分度得点の参加日数での変化

そして、プログラムへの参加日数が兄貴分・姉貴分度得点を変化させた要因として統計的に有意であったかを調べるために、SPSS を用いて、分散分析を行った。

表 3 参加日数の兄貴分・姉貴分度得点への影響に関する分散分析表

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 兄貴分・姉貴分度得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	349806.437(a)	3	116602.146	155.966	.000
切片	34506.854	1	34506.854	46.156	.000
af2	298295.407	1	298295.407	398.997	.000
参加日数	5326.549	2	2663.274	3.562	.029
誤差	245965.005	329	747.614		
総和	15281588.586	333			
修正総和	595771.443	332			

a. R2乗 = .587 (調整済みR2乗 = .583)

このように参加日数の効果は有意と認められた。

図 4 は変数にパーソナルリーダー参加者の有無を入れた兄貴分・姉貴分度得点の散布図である。

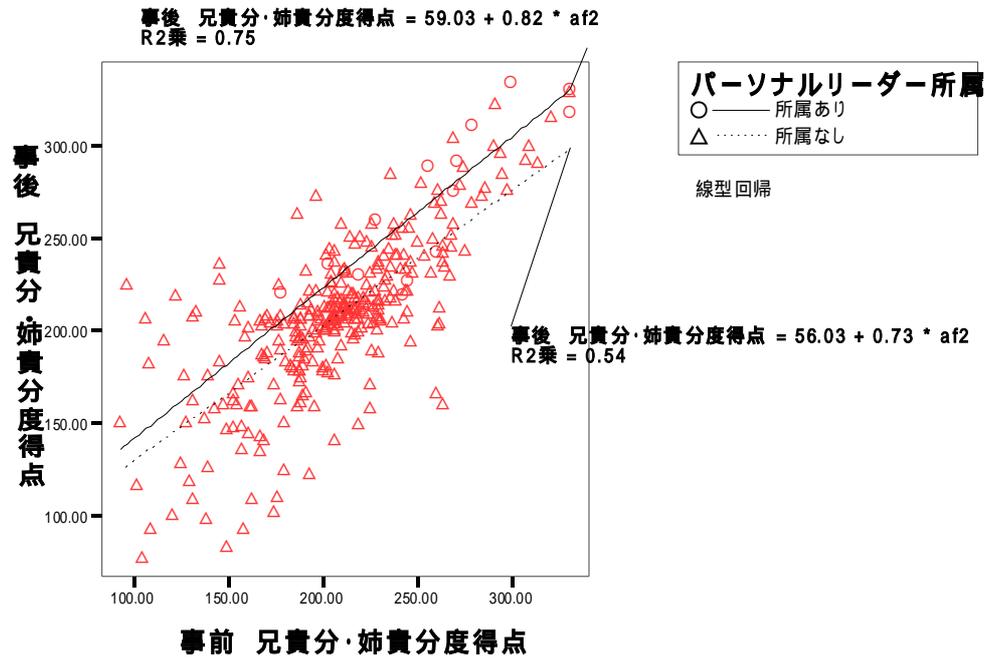


図4 2002年度 兄貴分・姉貴分度得点のパーソナルリーダー所属の有無での変化

そして、プログラムへのパーソナルリーダー所属の有無が兄貴分・姉貴分度得点を変化させた要因として統計的に有意であるかを調べるために、SPSSを用いて、分散分析を行った。以後の表のなかのパーソナルリーダー所属は p1 と表記する。

表4 パーソナルリーダー所属の有無の兄貴分・姉貴分度得点への影響に関する分散分析表

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 兄貴分・姉貴分度得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	352813.998(a)	2	176406.999	239.607	.000
切片	40052.773	1	40052.773	54.402	.000
af2	299738.026	1	299738.026	407.123	.000
p1	8334.109	1	8334.109	11.320	.001
誤差	242957.445	330	736.235		
総和	15281588.586	333			

修正総和	595771.443	332			
------	------------	-----	--	--	--

a R2乗 = .592 (調整済みR2乗 = .590)

このようにパーソナルリーダー所属の有無の効果は有意と認められた。

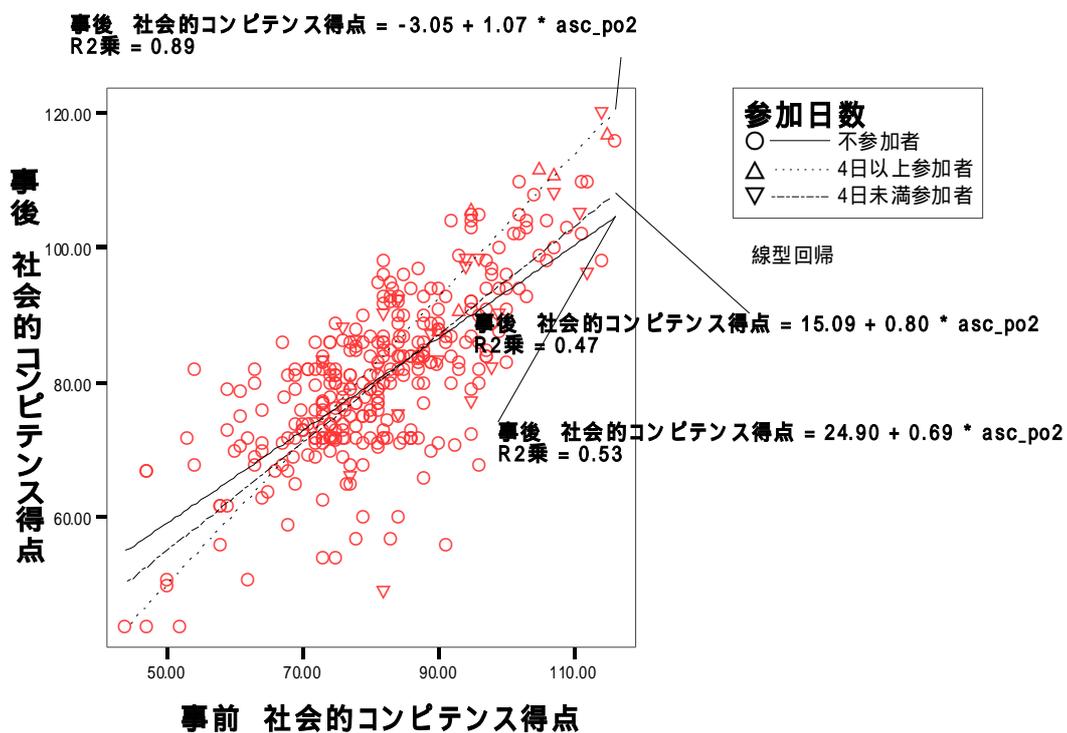


図5 2002年度 社会的コンピテンス得点の参加日数での変化

そして、プログラムへの参加日数が社会コンピテンス度得点を変化させた要因として、統計的に有意であるかを調べるために、SPSS をもちいて、分散分析を行った。

表 5 参加日数の社会的コンピテンス得点への影響に関する分散分析表

被験者間効果の検定

従属変数: 事後 社会的コンピテンス得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	30070.777(a)	3	10023.592	142.811	.000
切片	4202.734	1	4202.734	59.879	.000
asc_po2	26322.657	1	26322.657	375.033	.000
参加日数	496.175	2	248.087	3.535	.030
誤差	23302.306	332	70.188		
総和	2273472.123	336			
修正総和	53373.083	335			

a. R2乗 = .563 (調整済みR2乗 = .559)

このように参加日数の効果は有意と認められた。

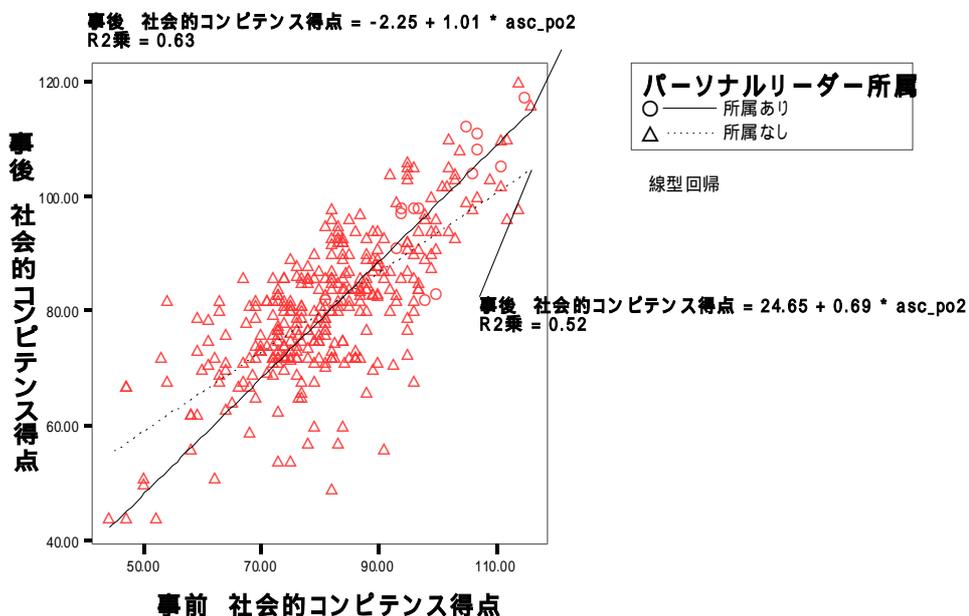


図 6 2002 年度 社会的コンピテンス得点のパーソナルリーダー所属の有無での変化

そして、プログラムへのパーソナルリーダー所属の有無が社会的コンピテンス得点を変

化させた要因として、統計的に有意であるかを調べるために、SPSS をもちいて、分散分析を行った。

表 6 パーソナルリーダー所属の有無の社会的コンピテンス得点への影響に関する分散分析表

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 社会的コンピテンス得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	29873.271(a)	2	14936.636	211.657	.000
切片	4046.597	1	4046.597	57.342	.000
asc_po2	25346.094	1	25346.094	359.162	.000
pl	298.668	1	298.668	4.232	.040
誤差	23499.812	333	70.570		
総和	2273472.123	336			
修正総和	53373.083	335			

a R2乗 = .560 (調整済みR2乗 = .557)

このようにパーソナルリーダー所属の有無の効果は有意と認められた。

次に変数にパーソナルリーダー所属の有無と参加日数の両方を入れて検定を行った

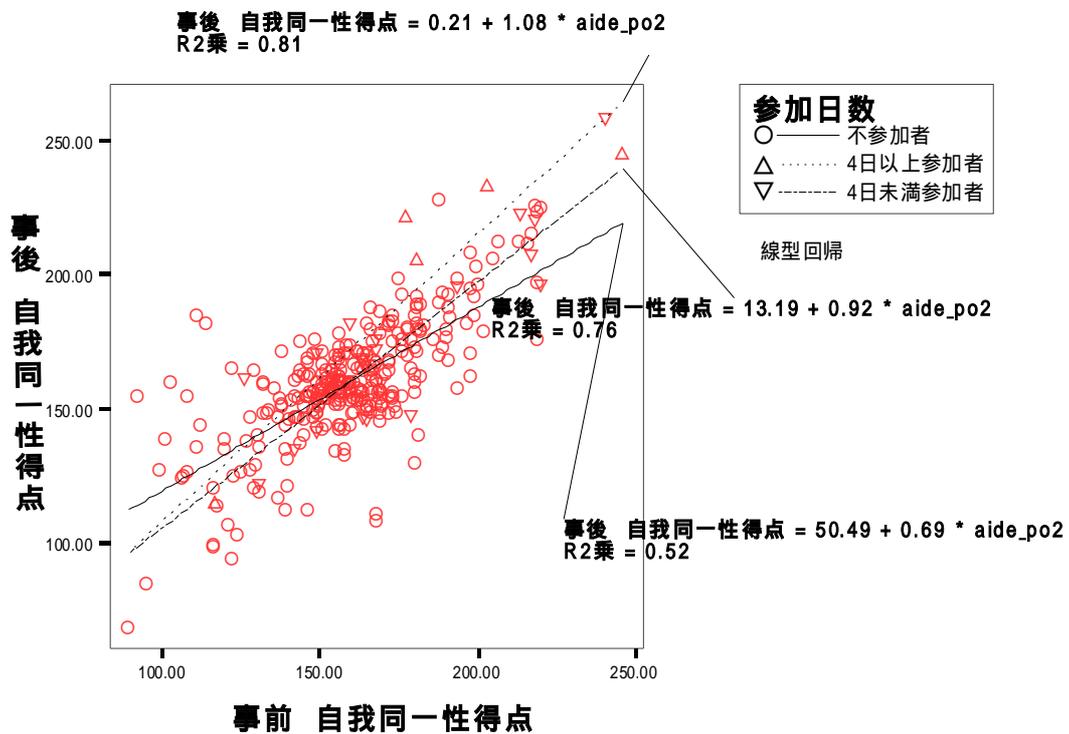


図7 2002年度 自我同一性得点の参加日数での変化

そして、プログラムへの参加日数が自我同一性得点を変化させた要因として、統計的に有意であるかを調べるために、SPSS をもちいて、分散分析を行った。

表7 参加日数の自我同一性得点への影響に関する分散分析表

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 自我同一性得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	115812.684(a)	3	38604.228	158.575	.000
切片	15278.297	1	15278.297	62.759	.000
aide_po2	103576.949	1	103576.949	425.464	.000
参加日数	2557.887	2	1278.944	5.254	.006
誤差	81310.529	334	243.445		
総和	8971604.032	338			

修正総和	197123.214	337			
------	------------	-----	--	--	--

a R2乗 = .588 (調整済みR2乗 = .584)

このように参加日数の効果は有意と認められた。

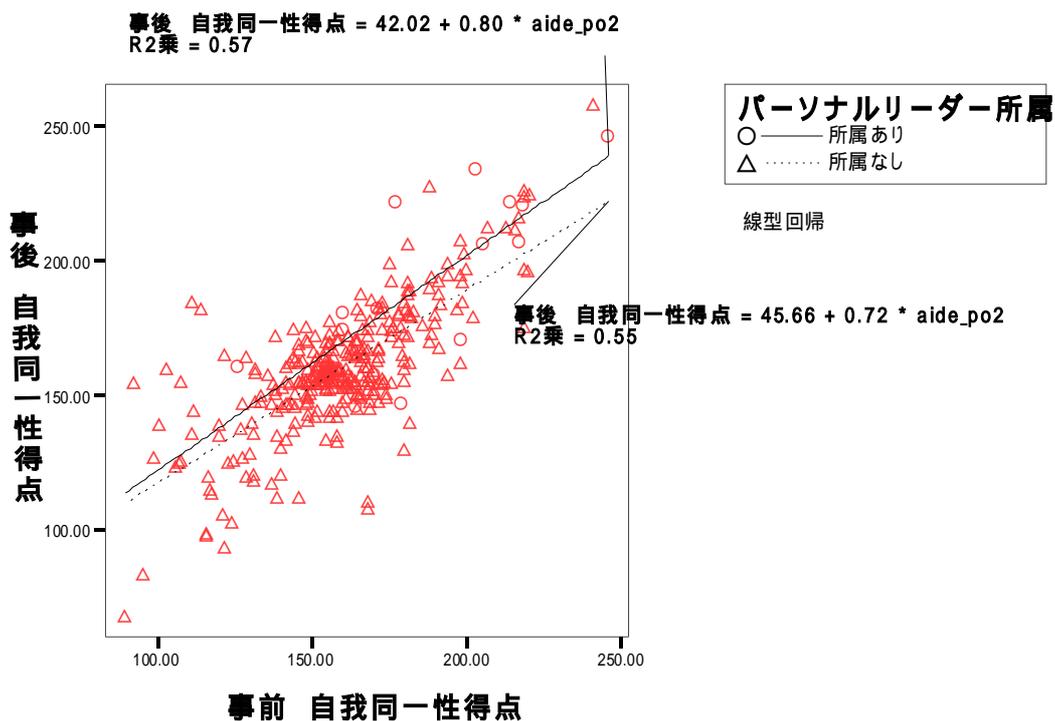


図8 2002年度 自我同一性得点のパーソナルリーダー所属の有無での変化

そして、プログラムへのパーソナルリーダー所属の有無が自我同一性得点を変化させる要因として、統計的に有意であるかを調べるために、SPSSを用いて、分散分析を行った。

表 8 パーソナルリーダー所属の有無の自我同一性得点への影響に関する分散分析表

被験者間効果の検定

従属変数: 事後 自我同一性得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	115058.180(a)	2	57529.090	234.841	.000
切片	14691.368	1	14691.368	59.972	.000
aide_po2	100260.136	1	100260.136	409.275	.000
pl	1803.383	1	1803.383	7.362	.007
誤差	82065.034	335	244.970		
総和	8971604.032	338			
修正総和	197123.214	337			

a R2乗 = .584 (調整済みR2乗 = .581)

このようにパーソナルリーダー所属の有無の効果は有意であると認められた。

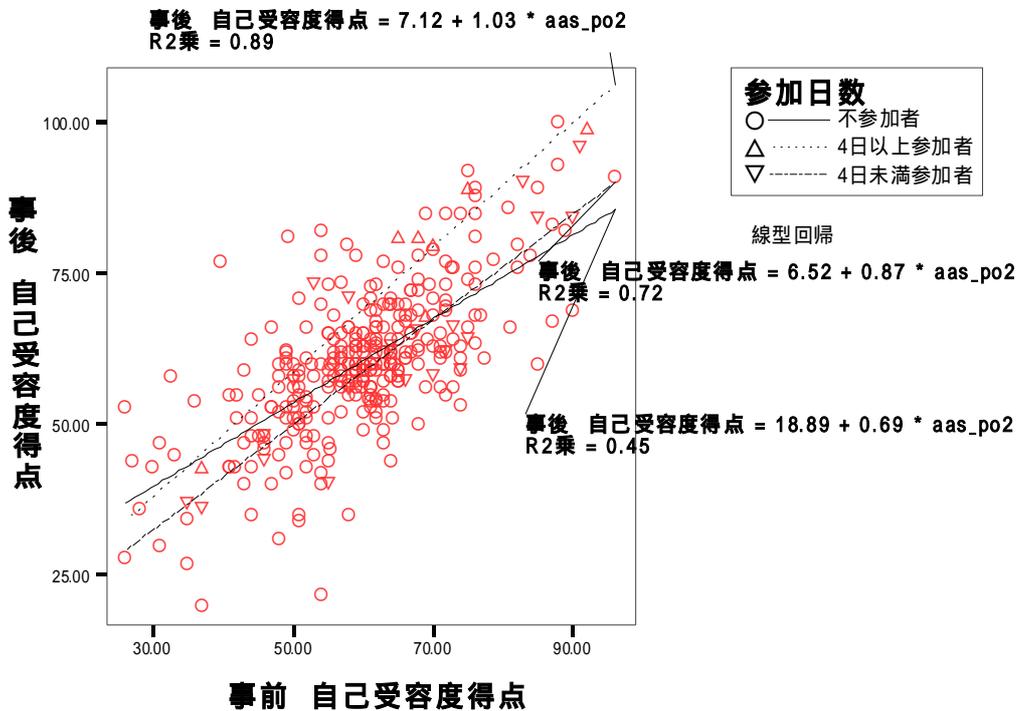


図 9 2002 年度 自己受容度の参加日数での変化

そして、プログラムへの参加日数が自己受容度得点を変化させる要因として、統計的に

有意であるかを調べるために、SPSS を用いて、分散分析を行った。

表 9 参加日数の自己受容度得点への影響に関する分散分析表

被験者間効果の検定

従属変数: 事後 自己受容度得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	27427.551(a)	3	9142.517	117.623	.000
切片	3901.836	1	3901.836	50.199	.000
aas_po2	25389.088	1	25389.088	326.642	.000
参加日数	860.345	2	430.172	5.534	.004
誤差	26038.725	335	77.728		
総和	1305536.837	339			
修正総和	53466.276	338			

a R2乗 = .513 (調整済みR2乗 = .509)

このように参加日数の効果は有意と認められた。

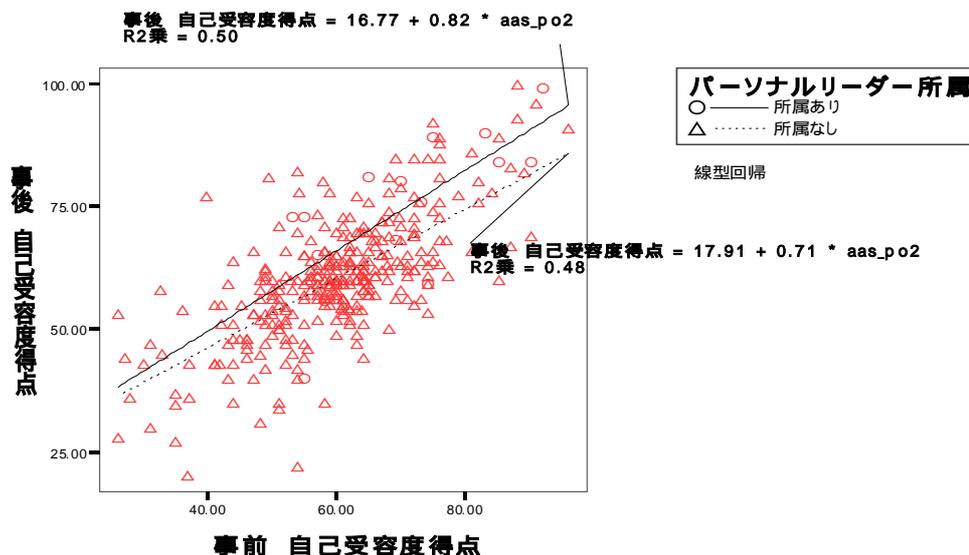


図 10 2002 年度自己受容度のパーソナルリーダー所属の有無での変化

そして、プログラムへのパーソナルリーダー所属の有無が自己受容度得点を変化させる要因として有意であるかを調べるために、SPSS を用いて、分散分析を行った。

表 10 パーソナルリーダー所属の自己受容度得点への変化に関する分散分析表

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 自己受容度得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	27198.593(a)	2	13599.297	173.954	.000
切片	4139.144	1	4139.144	52.945	.000
aas_po2	24258.724	1	24258.724	310.303	.000
pl	631.387	1	631.387	8.076	.005
誤差	26267.683	336	78.178		
総和	1305536.837	339			
修正総和	53466.276	338			

a R2乗 = .509 (調整済みR2乗 = .506)

このようにパーソナルリーダー所属の有無の効果は有意であると認められた。

次にパーソナルリーダー所属の有無と参加日数の2つを変数に入れて検定を行った。

表 11 2つの変数での兄貴分・姉貴分尺度の検定

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 兄貴分・姉貴分得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	353950.717(a)	6	58991.786	79.527	.000
切片	34546.076	1	34546.076	46.572	.000
af2	287584.353	1	287584.353	387.694	.000
pl	3040.607	1	3040.607	4.099	.044
参加日数	981.837	2	490.919	.662	.517
pl * 参加日数	233.585	2	116.793	.157	.854
誤差	241820.726	326	741.781		
総和	15281588.586	333			
修正総和	595771.443	332			

a R2乗 = .594 (調整済みR2乗 = .587)

このように 2 つの変数を入れるとパーソナルリーダー所属の有無の効果は有意と認められた。

表 12 2 つの変数での社会的コンピテンス尺度の検定

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 社会的コンピテンス得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	30186.493(a)	6	5031.082	71.387	.000
切片	3819.462	1	3819.462	54.195	.000
asc_po2	24940.384	1	24940.384	353.885	.000
pl	20.529	1	20.529	.291	.590
参加日数	306.647	2	153.324	2.176	.115
pl * 参加日数	50.461	2	25.230	.358	.699
誤差	23186.590	329	70.476		
総和	2273472.123	336			
修正総和	53373.083	335			

a R2乗 = .566 (調整済みR2乗 = .558)

このように 2 つの変数を入れると、両方有意と認められなかった。

表 13 2 つの変数での自我同一性尺度の検定

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 自我同一性得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	116330.332(a)	6	19388.389	79.432	.000
切片	14117.071	1	14117.071	57.836	.000
aide_po2	98061.990	1	98061.990	401.750	.000
pl	469.116	1	469.116	1.922	.167
参加日数	832.456	2	416.228	1.705	.183
pl * 参加日数	161.271	2	80.636	.330	.719
誤差	80792.882	331	244.087		
総和	8971604.032	338			
修正総和	197123.214	337			

a R2乗 = .590 (調整済みR2乗 = .583)

このように2つの変数を入れると、両方有意と認められなかった。

表 14 2 つの変数での自己受容尺度の検定

**被験者間効果の検定**

従属変数: 事後 自己受容度得点

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	27797.359(a)	6	4632.893	59.922	.000
切片	4113.781	1	4113.781	53.207	.000
aas_po2	24226.457	1	24226.457	313.343	.000
pl	272.485	1	272.485	3.524	.061
参加日数	545.641	2	272.821	3.529	.030
pl * 参加日数	80.837	2	40.418	.523	.593
誤差	25668.917	332	77.316		
総和	1305536.837	339			
修正総和	53466.276	338			

a R2乗 = .520 (調整済みR2乗 = .511)

このように2つの変数を入れると、参加日数の効果は有意と認められた。

#### 4.3 今年の調査表調査の結果

今回インタビューを行えた15人について、SPSSを用いて、対象者1人1人について、事前と事後、今年の各調査における4種類の尺度について尺度得点を計算した。そして時間の経過に沿って、各得点の伸び方がわかるように散布図を作成した。同じ人物に対して、「事前から事後」でプロットしてある方には、横軸に事前の得点、縦軸に事後の得点を取り、「事後から現在」でプロットしてある方には、横軸に事後の得点、縦軸に今年の得点をとった。

そして、時間の経過がそれぞれの尺度得点を変化させる要因として、統計的に有意であるかを調べるためにSPSSを用いて検定を行った結果、以下の2の尺度に対して、統計的に有意な差であると認められた。

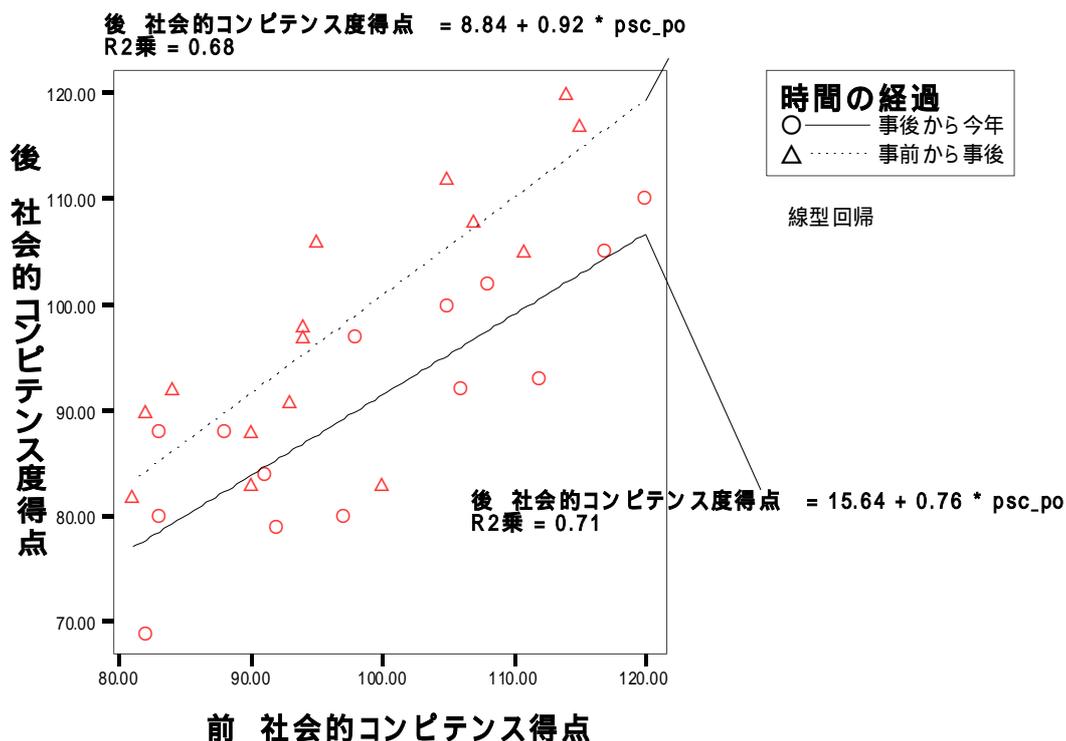


図 11 時間の経過に対する社会的コンピテンス度の変化

表 15 時間の経過の社会的コンピテンス度得点に対する影響の分散分析表

従属変数: 今 コンピ

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	3121.651(a)	2	1560.825	32.634	.000
切片	67.230	1	67.230	1.406	.246
psc_po	2699.711	1	2699.711	56.447	.000
時間の経過	592.056	1	592.056	12.379	.002
誤差	1243.522	26	47.828		
総和	263059.000	29			
修正総和	4365.172	28			

a R2乗 = .715 (調整済みR2乗 = .693)

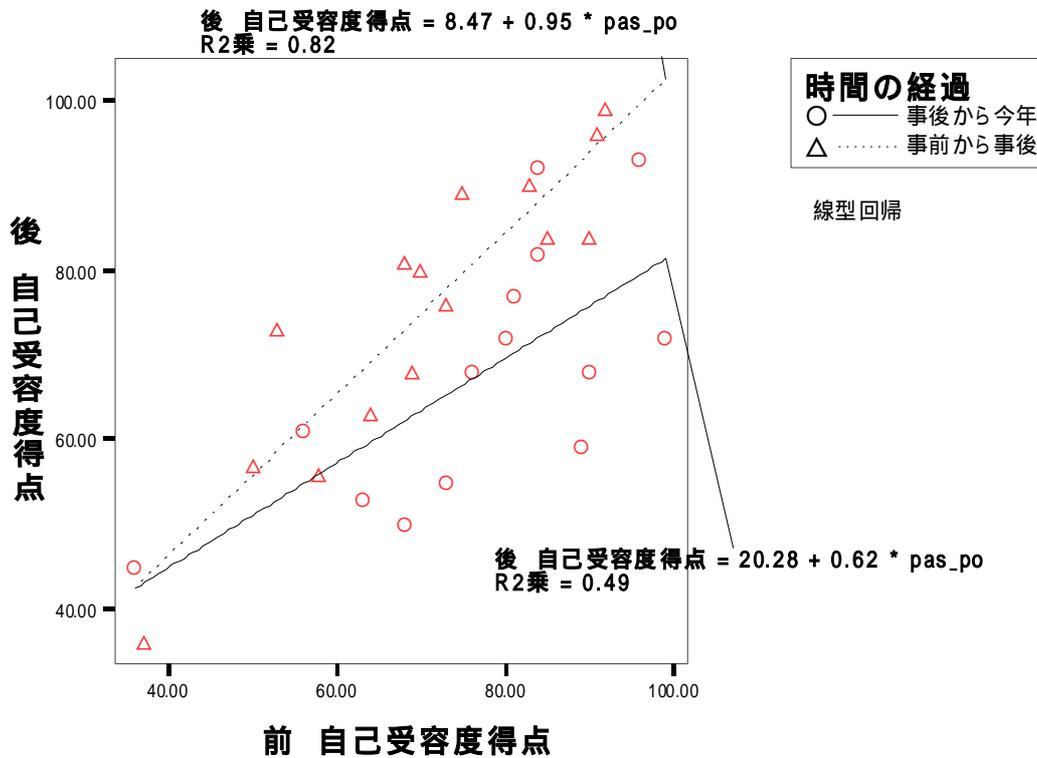


図12 時間の経過に対する自己受容度得点の変化

表16 時間の経過の自己受容度得点に対する影響に関する分散分析表

被験者間効果の検定

従属変数: 今 受容

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	4993.638(a)	2	2496.819	27.052	.000
切片	249.767	1	249.767	2.706	.112
pas_po	4551.134	1	4551.134	49.310	.000
時間の経過	1127.006	1	1127.006	12.211	.002
誤差	2399.716	26	92.297		
総和	156421.810	29			
修正総和	7393.354	28			

a R2乗 = .675 (調整済みR2乗 = .650)

## 5 考察

### 5.1 パーソナルリーダーの効果について

パーソナルリーダーの効果については、さまざまな活動を安心して、気軽に参加できる効果と、活動を継続的にしやすくする効果が考えられる。何かの活動に参加しようとするとき、1人で参加するのは不安もあって、なかなか参加しづらいものである。また、そのようなことのために参加する場合は、極めてその活動に関して関心がある場合に限られてくることが多い。しかし、このパーソナルリーダーに所属している場合、生徒会活動に興味のある生徒が集まっているため、ある程度の、どのような活動に対して興味を持つかということに関する同質性があると考えられる。さらにそのほとんどがボランティア部に所属していることで、その同質性はさらに高くなる。さらにここで重要なのは、彼らの仲が大変良いということである。同質性があり、仲が良いことで、タッチ・ザ・ネイチャーやほかのさまざまな活動に誰かが興味を持った際に、同じパーソナルリーダーの仲間を誘いやすくなる。また誘われたほうも興味がある場合はもちろん、あまり興味がない場合でも友達がいるので気軽に参加しやすくなり、さまざまな活動に参加できる。そうすれば、ここで、自分の新たな自分を発見できる機会が増え、自分の世界を広げることができたり、さまざまなことに興味を持つきっかけともなる。また、その活動が何回かある場合にも、前回の参加で、その活動に興味をもったり、行けば友達と会えるために、友達と遊びに行く感覚で次回も参加しやすくなる。

こういったことによって、パーソナルリーダー所属者はさまざまな活動を経験し、成功させることで自信やさまざまなスキルを身に付けていった。そのことが今回の4つの尺度としてでてきたものと考えられる。

今までは、参加してからのことについての研究はなされてきたが、このようなプログラムを多くの人に体験してもらうためには、いかに参加させるかについてはあまり触れられていないように感じる。これからこのようなプログラムを実行していくためには、いかに参加させるか、いかに参加しやすくするかを考えるべきである。今回の聞き取り調査で、仲のよい集団がはたした役割が大きいことが推測された、よって、今後このようなプログラムを行うときには仲の良いグループに話をもちかけ、参加しやすくし、その仲の良いグループからまた友達をつたって新たな参加者を生み出し、また、継続して参加できるようにするという方法もとれるのではないかと思う。そうすれば、パーソナルリーダーのよう

な生徒会組織に属さない、生徒の参加率も上がるものと思う。

## 5.2 2002年度データの再分析の考察

事前から事後にかけて、大きく点数が下がってしまったCさんを除いて、変数にパーソナルリーダー所属の有無、参加日数を片方ずつ入れて検定を行った場合、兄貴分・姉貴分度、社会的コンピテンス度、自我同一性度、自己受容度それぞれに対して有意であるという結果が出た。これは4日以上参加しても、パーソナルリーダーに参加してもそれぞれに効果があることを示している。2003年度の調査で測定された効果が果たして、本当にタッチ・ザ・ネイチャーの効果であったのか、パーソナルリーダーの効果ではなかったのかという疑問は、それぞれに効果があり、パーソナルリーダーだけによる効果でも、タッチ・ザ・ネイチャーザだけによる効果でもなかったという帰着となった。

次に、参加日数とパーソナルリーダー所属の有無の両方を変数として検定を行ったところ、兄貴分・姉貴分度に関しては、パーソナルリーダー所属の有無のほうが有意であり、自己受容度に関しては、タッチ・ザ・ネイチャーへの参加日数のほうが有意であることがわかり、社会的コンピテンス度、自我同一性度に関しては、有意差はないということがわかった。

兄貴分・姉貴分度に関してはパーソナルリーダーに所属しているほうが、タッチ・ザ・ネイチャーに4日以上参加しているよりも、より効果があるという結果が出たが、これはパーソナルリーダーの活動の中で後輩学校の行事を動かし、また、その中で後輩や、他の生徒を指導する立場となっていたことが、彼らの「上の者」としての自覚や自信につながったことが作用したと考えられる。また、ほとんどのパーソナルリーダー所属者がボランティア部に所属していることから、彼らはもともと、人の助けになることや、誰かの世話をすることなどを好んで行う傾向があり、そのことも兄貴分・姉貴分度に影響したと考えられる。それを裏付けるものとして、今回インタビューを行ったパーソナルリーダーのほとんどが「子供はかわいい。」「子供は好きだ。」と述べている。

自己受容度に関してはタッチ・ザ・ネイチャーに4日以上参加しているほうが、パーソナルリーダーに所属しているよりも、より効果があるという結果が出たが、これは子供がタッチ・ザ・ネイチャーの中で果たした役割が大きくかかわっているものと考察できる。というのは、普段高校生が接触しているのは同級生や教師などの大人である。教師などの

大人はとくに、高校生たちを「評価」する立場であるように思う。授業の成績だけでなく、授業態度、生活態度などを監視し、評価を与える存在である。それに対してキャンパーである小学生は、まず、お兄ちゃん・お姉ちゃんとして高校生を見る。そしてすぐになついてくる。つまり、高校生リーダーを肯定的なものとして捉え、それを正直に表に出して行く。このことが高校生リーダーに自己受容を促したと考えられる。ミード（1934）は相手が示した役割を自己の中に取り込むことで、自己を作り上げていくと述べている。つまりこの場合、小学生キャンパーが高校生リーダーたちを肯定的に受け入れ、そしてそのことを正直に態度や言葉で示す。そしてそのことを高校生リーダーは自分の中に取り込み自分を肯定的なものとして受け入れる態度を身に着けたということである。これは、人をすぐに受け入れる、「こども」ということがひとつキーポイントになる。高校生どうしや、大人とではすぐに無条件で受け入れるということはなかなかできなくなり、小学生と接するよりも自分を受容する態度は取り込みにくいと考える。

また、4日以上という意味であるが、高校生リーダーが見る班のメンバーは毎回違い、小学生キャンパーも固定したメンバーではなく、参加する子供は回ごとに違うが、毎回参加する子供もおり、その子供たちは高校生リーダーのことを良く覚えている。そして、以前参加したことのある高校生リーダーがまた参加すると「また来てくれたんやね。」などの喜びを表したり、別れ際に「また次も来てね。」などの言葉が高校生リーダーにかけられる。また、何回も参加することにより、高校生リーダーも子供たちへの対応の仕方や楽しませ方がわかり、それがさらに子供たちに肯定的に受け入れられ、より良い自己像を自己の中に取り入れられたと考えられる。

### 5.3 2004年度データの考察

今年取ったデータと2002年にとったデータを時間の経過に沿って散布図に表すと、社会的コンピテンス度と自己受容度に関しては、時間の経過がそれぞれの尺度に及ぼした要因として統計的に有意であると認められ、兄貴分・姉貴分度と自我同一性度に関しては、有意と認められなかった。これはタッチ・ザ・ネイチャーをやると社会的コンピテンス度と自己受容度が一時的に大きく伸び、タッチ・ザ・ネイチャーの活動をやめてしまうとその伸びは小さくなってしまふことをあらわしている。タッチ・ザ・ネイチャー事後の段階から今年までの間に何が作用してこのような結果になったかを特定することは難しいが、逆に言えば、社会的コンピテンス度と自己受容度は、兄貴分・姉貴分度、自我同一性度に対

して、タッチ・ザ・ネイチャー以外で彼らが経験してきたことから得にくいものであるということが言えるのではないだろうか。そういう意味で、タッチ・ザ・ネイチャーは社会的コンピテンス度と自己受容度得る、貴重な体験ということが言えると考えられる。

時間の経過が自我同一性得点と兄貴分・姉貴分度得点に与える影響は、統計的に有意でないという結果がでている。これは、継続してタッチ・ザ・ネイチャーの効果があるということを示しているとも考えられる。しかし、社会的コンピテンス得点と自己受容度得点に関しては、時間の経過が与えた効果が統計的に有意であると認められた。グラフを見てもわかるように、得点の伸びは時間が経過した今、下がってしまっている。これはタッチ・ザ・ネイチャーの効果を持続していない、定着していないということが考えられる。2002年度の吉本の調査では、Cさんに関しては、対他的な行為レベルはプラスの方向へ向かっているのに、自己評価は下がっている。吉本はこれを対他的成長に失敗している、つまり、対他的な成長を自分のなかに上手くとりこめられていないからであると分析した。自己評価が下がらないまでもこれと同じようなことが自己受容度と社会的コンピテンス度に関しても起こったと考えられる。上手く内在化が行われていれば、継続した効果も期待できるはずである。効果や成果を定着、継続させるような仕掛けをつくっていくことが今後の課題であると言える。

ただし、2002年、2004年ともにタッチ・ザ・ネイチャーを4日以上参加したものとパーソナルリーダー所属者が大きく重なり、検定においてもそれにより相関が非常に高かったことには注意が必要である。今回の調査では参加回数が多いものから聞き取りを行っていたため、パーソナルリーダー以外の少数回参加者についての聞き取りが十分になされていない、今後はパーソナルリーダー所属者でない参加者についての調査が必要になってくるものと思う。

〔文献〕

浅野智彦,2001,『自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ』 剋草書房.

飯田稔,井村仁,影山義光,1988,「冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容」『筑波大学体育科学系紀要』 11:79-86.

Charles Horton Cooley,1902,Human Nature and the Social Order, Charles Scribner's Sons,(=1921, 納武津訳『社会と我-人間性と社会秩序』 日本評論社.)

George Herbert Mead,1934,Mind, Self, and Society; from the Standpoint of Social Behaviorist, The University of Chicago Press. (=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『現代社会学体系 10 ミード 精神・自我・社会』 青木書店)

川村協平,1981,「キャンプ体験による女子学生の自己概念の変容」『山梨大学教育学部研究報告』 32:167-172.

栗本かおり,1997,「青年のコンピテンス評価尺度作成」『関西学院大学社会学部紀要』 78:145-152.

清水博,2000,『場と共創』 NTT 出版.

橋爪貞夫訳,1981,『家族』 黎明書房.

立木茂雄,1998,「EISKG (Ego Identity Scale at Kwansei Gakuin)」

(<http://www-soc.kwansei.ac.jp/tatuki/OtherScales/SAMKG%20%26%20EISKG.html#anchor126364>、2004、11、15)

立木茂雄編, 2003, 『不登校生の自立のために何ができるか—無学年制自然キャンプにおけるリーダー経験の効果を実証する—』 2002-2004 年度社会福祉・医療事業団（子育て支援基金）助成金研究成果報告書, 財団法人子ども支援財団.

——編, 2004, 『不登校生の自立のために何ができるか—無学年制自然キャンプにおけるリーダー経験の効果を実証する—』 2002-2004 年度独立行政法人福祉医療機構（子育て支援基金）助成金研究成果報告書, 財団法人子ども支援財団.

吉本顕太郎, 2004, 「キャンププログラムにおける場の構造と参加者の自己の変容」『同志社社会学研究』 2004(8) 55-69

ジェレミー・ボワセベン,1986,『友達の友達』.岩上真珠・池岡義孝訳